



傳學齋恩日記

二

26
5759
2



又 5759 2



倭学戴恩日記卷第二

平山田与清稿

天保四年正月二日富岡富太郎消息一
御詠草添削流々まはつて以て乃作を修

去年の十二月

柳菅大相国の大殿

おわくりしるも子息鶴子代磨子破魔
弓はあつてもまはつてみるは月の
流るるちの日は



高日早苗

ともし改ち臣よは名を地りしん方お評さ
とんて唐名ハ尊敬の付用くしりしんき
柳堂との幕府とみお地りしん公家まはしん
武家御昇進の御規模うしんきさうとん〇
点の所ハ鶴と松春と張の由様おはしん
ゆ之假名を御書とみ地り〇弓取とす
職人お合うんて輕きおあしん
ふまはしんの道弓のそなへんハ武家
此美名おあしんハ此のそなへんハ武家

己日御使して白銀五枚おはしん
六日御次おはしん紫田源助して昨日の
恩賜のうしんハ後取をよる

しんきさうとん
ハ尾海おはしん
ゆまおはしん
しんきさうとん

平小山向与信
奄如松ハ白の孫のそ

笑ふぬ子代あそく

君がとくまき

七日賀正の礼よりおぼろ半田篤胤前田夏
蔭をともやうまをさう一間おぼろあそく何れも
余をいさ同朋河合瓢河原をさう一節をさう
まはるおそお笑やうまはる大廊よりお所
て

柳菅御旗奉立の次席也いさあそ御玄園の
板間より前の高き如の上席に余次より篤胤友

蔭にしく御目見齋者也後のひまふは猿樂
に輩よりい今日もは海鳥鶴夏蔭に沙坊
士豊田長喜指揮して例の御玄園の板間
著しく拜賀をさうまはるつるおぼろあそく
富岡利和をさうまはる御問のひねをさう
廻沙にしくまはる○執事詞書の縁語をさう
葉集より左のより取方なまはるまはる
まはるまはるまはる取方なまはるまはる
不苦く

予は... 君... 物

代... 義... 賜物... 縁... 取... 下... 取

青海原... 山... 取... 海... 取... 取

十三日 田氏 郎 銀次 柴田氏 源 助

御詠草を傳ふ

春旅

よのひふもひもたはる里
こころ思ひくちり海を渡る
くち

下句

まよ揺らぎをさぐりてはる里
思ひくちり海を渡る

詠祝言

くちりてはる里を渡る緑子

ア又おもしろくはる里を渡る

詠草

よのひふもひもたはる里
こころ思ひくちり海を渡る
くち
まよ揺らぎをさぐりてはる里
思ひくちり海を渡る
くち
ア又おもしろくはる里を渡る
詠草

から己が時言せむに
約る

御詠草
實に格別の道義を奉感但も字を
類のや
よふい
終ふ
門

十六日
史館
富岡利和久未博

言ふて讀む

詠倭学

倭学従来を古道群書搜索事
通考宛如航海疾遅船彼岸難
窮人易老

何れの書はは北の又は南の事の
は

十八日
関の趣を得る別名書〇

いづれも上の句の中を上下に引くやうに
病は毎ふし〇字あまの句にあはれおの
こも限る外の子をいふ人も古来の決
例〇刻らに彼又の意なるや象を
〇語をちに行字集

いづれも上へ引くは
いづれも下へ引くは

和歌式部集

あまのこをいふは

いづれも上へ引くは

れども上へ引くは但し上へ引くは古来の決
例にまゝに引くは〇物事の御海の時節
ふしんをの字強き春は海にて必す知る
はしんも又も強きしんも時やしんを
用ゝ例に伊勢物語及後撰

いづれも上へ引くは
いづれも下へ引くは
いづれも上へ引くは
いづれも下へ引くは

山方道河原に同朋衆也。お田健介は清和源氏が
門人として余りその親しくお宮師子お亥の意
あつて源氏に依りて年の三年四年前に
こゝに中^かありてお宮師子とて或時津輕甲斐
にありて源氏の御許にたてて此れお門人を
とありてお宮師子の御許にたててお宮師子
とてお宮師子の御許にたててお宮師子の御
先房草を山邊の御所の濱に御師を建
てし事お宮師子の御許にたててお宮師子の御

行一健介をたててお宮師子の御所にたててお宮師子の御
人をたててお宮師子の御所にたててお宮師子の御
仲尼の御所にたててお宮師子の御所にたててお宮師子の御
お此言

二月可山道河原の御所にたててお宮師子の御

お宮師子の御所にたててお宮師子の御所にたててお宮師子の御
お宮師子の御所にたててお宮師子の御所にたててお宮師子の御
お宮師子の御所にたててお宮師子の御所にたててお宮師子の御
お宮師子の御所にたててお宮師子の御所にたててお宮師子の御

雲手吹拂事乃如久朝乃露
手朝乃風夕乃風乃吹拂事乃如久拂
賜比清賜不御心遠以互青人草遠
平計安知治給事遠赤根刺日鳥玉
之夜鳥玉之夜赤根刺日止那之祈奉
留珠更尔今吉可良辰手天齋場
諸天祈奉流祀代波香丹寸底白丹
寸底橫印仁釀留大御酒手供奉
山乃物波色乃慈物毛乃柔物海乃物

波籙乃廣物籙乃狭物甘菜辛菜仁至
留天留萬除高仁積之波志大御前仁奉
留誠乃志手知食天八咫鏡乃曇利
那岐我如久明仁八尺勾玉乃明奈
留我如久照志給此家乃榮此國
乃治留事波久堅土乃天荒金乃地止
共仁窮無久村松乃松乃葉乃常磐石
尔野野尔夜乃守日乃守止護利福
倍給用怨義恐中賜止中須

辭別申コトワケマシ今日大前ケフオホマヘ仁孝集ニキウシツ和仕奉ワシカヘマツ
留諸人乃中ルモロヒトノナカ来觸キチカ性觸セイチツ目亦見耳メモミミ
示シ聞不慮乃汚穢キコカ不淨キヨカ奴事ヌシ有アリ
大御神乃オホミカミノ廣ヒロク久厚キウコウ支御シミ息手イシテ垂賜タラシメ
見直志ミナホシ聞直坐キコシ天常テンジョウ盤石ハシシ仁堅ニキヤ般石ハンシ仁
守坐モリイ天幸テンサイ賜タマフ同ドウ忍義ニシギ忍義ニシギ申給マシタマフ止トメ
中ナカ渾マツル

色葉類イロハノ館クワン也ヤ

十トウ有ユけケしシのノ館クワンにニてテもモ富トモ富トモ利リ和ワ

色葉類イロハノ

寶壽院ホウジュウイン採サイ河カ度ドいイらラしシのノ生シ生シ結ケツ

通ツウ用ヨウなナらラしシのノ館クワンにニてテもモ

廿日ニニチ登トウ館クワン也ヤ色葉類イロハノ函フンをヲ献ケンすス

之ノ行ユク

色葉類函銘并序

文政十二年夏六月十日始造色葉類函
蓋フタ倭ヤマト漢カン所トコロ未ミ聞ク也ヤ如ニ彼カノ淵フミ鑑カミ類ル函フン
以テ函フン名ナ之ヲ則スレバ難ガ有リ似シ於テ天アメ倭ヤマト作ツク裁サ於テ

皇朝猶為不使夫用此器之法先涉捕
羣書抄出故多之程籍領納之
色系字名者抽運之中出之而指於
冊清書之而按索目錄成焉凡古今
天下之事可集賢通考于此移用
之國家則政教之跡可閱辨知于
此實非徒擾苦於搜索者之
類也古之器用利則用力少而就
効衆此器豈可不謂博怡家之利

器字銘曰

類函始造
四十七屬

摠括故事

目錄通考

配當在差

九流百家

似理亂麻

成說何邪

夜以繼日 戶田氏 銀次 柴田氏 助兼

御詠草 卷之三 終了 御詠草 卷之三

御詠草 卷之三 終了 御詠草 卷之三

御詠草 卷之三

あはれなる御心遣ひに
かたじけなく御心遣ひに
と向ふ上りし御心遣ひに

上りし御心遣ひに
かたじけなく御心遣ひに
と向ふ上りし御心遣ひに

かたじけなく御心遣ひに
と向ふ上りし御心遣ひに

此事也

廿九。生難より少役の文に
かたじけなく御心遣ひに

廿七。市常國御暇御上使
かたじけなく御心遣ひに

廿九。市常國御暇御上使
かたじけなく御心遣ひに

春の日のあけをいふを事記す

田の民を待たせりし山田中
とて古しし山田中をいふこと
山田中瑞慶のいふ山田中

山田中瑞慶のいふ山田中
山田中瑞慶のいふ山田中
山田中瑞慶のいふ山田中
山田中瑞慶のいふ山田中

山田中瑞慶のいふ山田中
山田中瑞慶のいふ山田中
山田中瑞慶のいふ山田中
山田中瑞慶のいふ山田中

山田中瑞慶のいふ山田中
山田中瑞慶のいふ山田中
山田中瑞慶のいふ山田中
山田中瑞慶のいふ山田中

二月に御臨りなす所より、
御まゝに流るる昆布を御覧
し法船のりなす

水に寄る中流のたより、
同く... 史籍...
命を待たし、
法船のりなす

... 身...
... 身...
... 身...

いよん...

中流の...
...
...
...
...

三ノ富田利和...
...
...

何書取

一 新法之目

知恩院字録沙家目録...
...
...

御下向の事と申すは法船の御下向の事と申す
らるるに後御下向の御下向の御下向の御下向
の御下向の御下向の御下向の御下向の御下向

十日御下向の御下向の御下向の御下向の御下向
の御下向の御下向の御下向の御下向の御下向

小山御下向の御下向

知恩院の御下向の御下向の御下向の御下向の御下向
の御下向の御下向の御下向の御下向の御下向
の御下向の御下向の御下向の御下向の御下向

御下向の御下向の御下向の御下向の御下向の御下向
の御下向の御下向の御下向の御下向の御下向

二月十日 大友保の御下向

高岡の御下向の御下向

廿八日御下向の御下向の御下向の御下向の御下向
の御下向の御下向の御下向の御下向の御下向
奉願上人の御下向

私箋の御下向の御下向の御下向の御下向の御下向

御下向の御下向の御下向の御下向の御下向

御下向の御下向の御下向の御下向の御下向

十月廿三日 仰有公後不亦愛

自一書

尊命如欲知亦於文以爲

所近也

有慶以爲海之百品也什

有知也元日

當御殿中

於此

河

中陵沙執事

王原

二月廿一日

小

五

華頂

中

依

新

九月中

水戸殿 御書
生館 御書

御書 様御用 扶桑 採葉集 注釋 以右
御書 御掛 御書 御書 御書 御書 御書
教授 仁高 御書 御書 御書 御書 御書

御書 御書 御書 御書 御書 御書
御書 御書 御書 御書 御書 御書
御書 御書 御書 御書 御書 御書
御書 御書 御書 御書 御書 御書

御書 御書 御書 御書 御書 御書
御書 御書 御書 御書 御書 御書

御書 御書
御書 御書

御書 御書 御書 御書 御書 御書
御書 御書 御書 御書 御書 御書
御書 御書 御書 御書 御書 御書
御書 御書 御書 御書 御書 御書

御書 御書 御書 御書

御書 御書 御書 御書

華頂山殿

中汲令申

此外取御書取致さるる御物

三月十八日余殿より法船作を結ば

るらるる十日より西丸大船御所あり

と

向方の君に御書取致さるる御物

御書中の書も御所の御書と申す

一と申す御書は御所の御書と申す

於て御書取致さるる御物

御書中の書も御所の御書と申す

御書中の書も御所の御書と申す

御書中の書も御所の御書と申す

御書中の書も御所の御書と申す

御書中の書も御所の御書と申す

御書中の書も御所の御書と申す

御書中の書も御所の御書と申す

御書中の書も御所の御書と申す

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of cursive script.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of cursive script.

Handwritten cursive script, likely a list or notes, consisting of several lines of text.

Handwritten cursive script, possibly a title or a specific entry.

Handwritten cursive script, continuing the list or notes.

Handwritten cursive script, possibly a name or a specific entry.

Handwritten cursive script, possibly a name or a specific entry.

Handwritten cursive script on the left page, consisting of several lines of text.

御其書様

御原中様

大納言様

此所請の事

言

詞

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

晦日杉室江川

言事水戸相公の御座りて

この國の御座りて

四月十二日石川御座りて

御座りて

少の借和を

御座りて

相公本月廿三日水戸御座りて

午時少石川御座りて

十時

言事

少の借和を

御座りて

相公

言事

御座りて

四月

同禄

の汁飯のちよひにふたをこゝろに百粒の
 所へいゝまゝあはれこゝろ久未博言増あは
 ちまのまらほりこゝろ事いゝまゝあは
 馬車十郎一毎のこゝろいゝまゝあは
 られのものほりあは
 廿下 詔御所いゝまゝあは
 古今集の漏記いゝまゝあは

御

山
山

面
面

侍
臣

床

山
山

面
面

引
座

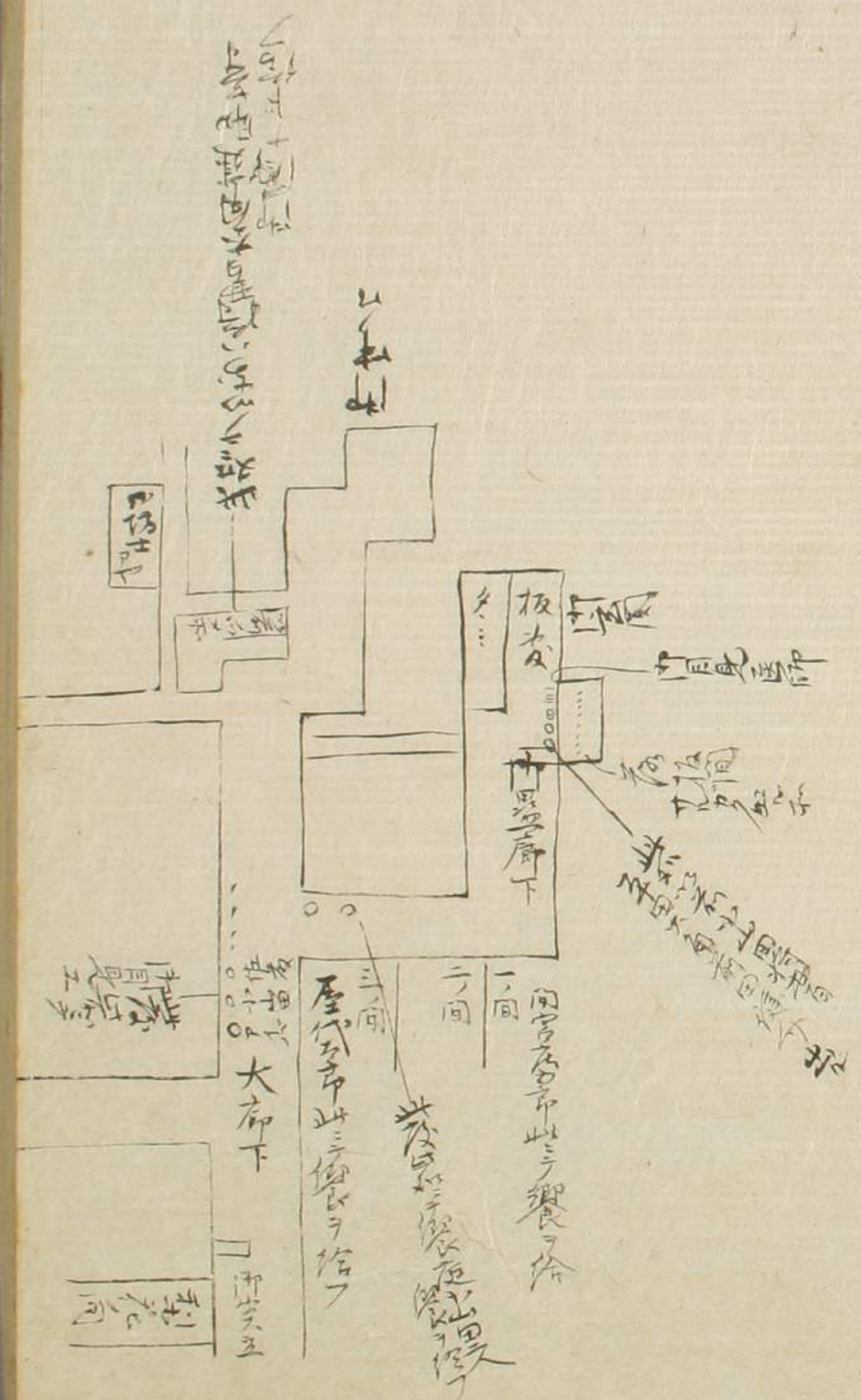
西丸

御簾中様より拍解をいゝまゝあは
 講所いゝまゝあはれこゝろ我いゝまゝあは
 沙府いゝまゝあはれこゝろ朝
 石の礎及瑞石の礎席をいゝまゝあは
 袂いゝまゝあはれこゝろいゝまゝあは

いふ事や

廿二の少く相と云行封國をいふが事
もいふて由る門の少く候もいふ事
已れ時許少く候もいふ事
沙天寺番御成庭より大出の余作産候
列産して法門と云ふ
乃家の字頭と名に垣号を造り
と稱し取立候以同堂に由る事
向て候て御成をいふ御成と云ふ

席にまら吸物に取有焼る矣あまそり
まらあま次にてけ之京の少候



々誓命持天降之時八尺勾璽鏡
及草那藝鏡を副て詔る此
之鏡者專為我御魂而如拜五前
伊都岐奉とて八尺勾璽天照
大御神の天石屋戸を開て軒許如
理坐し時玉祖命か作とる八尺勾
璽之五百津之御湊麻流なり鏡ハ
同時伊斯許理度賣命か作と
る八尺勾璽の神鏡ハ草那藝鏡

速須佐之男命の出雲國より八咫遠
く智を吐散るなり時大蛇の尾中
より出る都矛乃の大刀より天叢
雲鏡とらりて日を平武尊東夷
征伐の時駿河國より亮後が野火
を射て焼殺奉らんとて此鏡
て草那を藉りて六火躰て亮後
の方へ向し焼て遂に勝利しん
る草那之鏡と名を負しん

右の三種神器も天皇同族の良臣
御つとを崇神天皇六年別々鏡鈕
此二を摸せしめて護身の御重
御世の天皇踐祚の日所獻
乃神皇之鏡鈕も鏡鈕も温明
殿に女しり内侍所も賢所
も神鈕も夜御殿に女して宝鈕
と神の熱て神代もこの神鏡也
入姫命守護し御して大和國

笠懸色に磯城神籬をきて冬
御の後重に天皇の御世倭姫命
寺護し御して國を治廻し
倭勢同五十鈴川上鎮座し
これ五十鈴宮天照大神神の鈕も
真の神代も御つとを同時
伊勢も良臣御つとを景行卷
早稲年十月日平武多話を受て
東征し多時伊勢大神宮に

て御くまの御姑倭姫命神劔を授
て護身の御宝と云ふは此の時階
河内國に遷る難の所勝利をあらはし
目を平衣を遷化の後所妃尾陸國
愛智郡大上邑の稻種公の妹宮
所姫社を立てて神劔を祀はるる也
又今の熱田大神宮也天智天皇
七年新羅沙門道行の度盜出
しをりしと云ふ神威揭焉とも云ふ遠

る能はる今の子も先づ鎮
まらざる八尺勾穂のこゝに換造し
つとを御神代を侍りしを夜御
殿の御帳中御枕の二階上と云
ふと云ふは御劔に於て此
三種を御重宝御内侍所と云ふ
と神代と云ふを内侍所天徳の境
に南殿の御座を懸ては徳去
久の鏡と云ふ鏡を御劔に懸て

唐櫃^{カラヒツ}に納^{ウケ}し^てま^るは^り傳^ハる^る長^ク永^クの^記記
西^ニ海^ニに^御ま^りし^て三^年を^居て
還^ルる^に宝^劔を^此時^に西^海に^沈失^ス
し^てを^沙門^に渡^りて^來り^し神^皇位^の時
夢^ヲ想^ハり^しに^依り^て傳^ハる^る宝^劔
を^宝劔^に准^て用^さる^るに^神皇^位
を^永永^に海^底に^求む^るに^宝劔^を
お^し傳^ハる^る後^に西^海に^天皇^の御^代
南^山に^入り^しに^後花園^院

長^祿二^年六^月再^度歸^洛あり^てあ^らく
皇^居に^傳り^しに^津代^の傳^ハる^る
真^鏡を^依り^て傳^ハる^る神^皇位^の
熱^田の^神正^幹勾^魂を^神皇^位
箱^に安^く鎮^めし^て天^地を^考へ^り
遠^く長^く皇^基を^考へ^り
度^に鏡^に止^りし^て内^侍所^に傳^ハる^る
あ^らく^神皇^位を^考へ^り
津^代の^寶物^をあ^らく^貴き^とし^て

懐紙 あきつきの

宮の清い御を祝ひまゝに
いふやちいふはくはま
よめをふれ

廿一日旅御所より
縁山の學頭公日法師月行事貞隆法師
を所座に陪りて聴衆より
言ふに過し十六日は法
寺の書を同答せしむる
詩

中地
仰と
い

あ
ま

晦日雨水戸侍臣藤田彪
おと
一

西丸のくまのぼるの中へ水巻を流るる
とも

すまのくまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

くまのぼるの中へ水巻を流るる

官と御禁酒とを批九殿卿法眼松室江州

岡本帶刀池内大學をあらわす一紙汲はく

申おろしつらなむかひのこころを真澄

聖人を賞し賢人を罰する物にあらざらん

十丁條のくまのぼるの中へ水巻を流るる

此の巻の終り

此の巻の終り
形勢の急変
海流の上の舟
孤舟の舟
志をたす舟の
舟の舟

舟の舟
舟の舟

舟の舟
舟の舟

舟の舟
舟の舟

ふんぞりて結成の上の世は、
まはるる世に、
ふんぞりて結成の上の世は、
まはるる世に、
ふんぞりて結成の上の世は、
まはるる世に、
ふんぞりて結成の上の世は、
まはるる世に、

あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、

まはるる世に、
まはるる世に、
まはるる世に、
まはるる世に、
まはるる世に、
まはるる世に、
まはるる世に、
まはるる世に、

あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、
あはれなる世に、

午午の鐘は鳴りて中門の鐘は鳴りて
官道は静かに暮れに
假山は如くかたむけに
やまはかたむけに
あまのついでに
停午日

草の中は塵はくさくさ
空の心は秋の月
法衣の茶をいれて
貞徳法師もまを
酒の香もいれて

可き移し中門の鐘は鳴りて
十の鐘は鳴りて
あまのついでに
あまのついでに

夕夕夕

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

神風行書表紙の巻を交言のあふと多路
ものさし。さしけのさし。西行

あふと多路のさし。さし。さし。さし。

あけはさし。さし。さし。さし。さし。

集巻の夜會部を交言のあふと多路

語さしけのさし。さし。西行

あふと多路のさし。さし。さし。さし。

あふと多路のさし。さし。さし。さし。

西行系語の語をさし。さし。さし。さし。

語未述のさし。さし。さし。さし。さし。

洞さし。さし。さし。さし。さし。さし。

あふと多路のさし。さし。さし。さし。

あふと多路のさし。さし。さし。さし。

洞さし。さし。さし。さし。

月洞日語の語をさし。さし。さし。さし。

あふと多路のさし。さし。さし。さし。

あふと多路のさし。さし。さし。さし。

あふと多路のさし。さし。さし。さし。

春の風の舟のり

燕の尾連なる葉も月うぐすほす

春の風の舟のり

春の風の舟のり

春の風の舟のり

春の風の舟のり

春の風の舟のり

春の風の舟のり

春の風の舟のり

春の風の舟のり

十二午の時

帯カニ好内膳

春の風の舟のり

春の風の舟のり

十甲の風の舟のり

春の風の舟のり

終る湖をよそ河草歌を明日今宵中
とくをよそ河草歌をよそ

不ふる日めりるるるるるるるるる

ふとくもるるる

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

袖の月うさ

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくく

くくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

く

河門の義経が形をなしてはつとて
うきよ親善の御書よりしるせり
あまの志しし河門の義経
傳法流しつとて流る
東叡准后法親王
新法親王の侍はつとて
御書よりしるせり
河門の義経
河門の義経

後より流るる河門の義経
古市河門の義経
ら好む後余の御書よりしるせり
人々も若くは河門の義経
並に流るる古市河門の義経
宮の河門の義経
今日に流るる河門の義経
多。烏帽子河門の義経
焼うは流るる河門の義経

ちと國 *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni*

回 *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni*

は *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni* *chitokuni*

chitokuni *chitokuni* *chitokuni*

御學殿

九月九日

御學殿

布薩戒を

布薩戒を

御學殿

御學殿

御學殿

御學殿

九月九日御學殿

御學殿

御學殿

御學殿

御學殿

御學殿

御學殿

御學殿

御學殿

まらまらとくしくぬ波くもなまを咲はる
みねなるまじりし中乃すこるまじり
慧嚴法師貞隆法師顯宗法師文章法師
のまじりし傳ふ貞隆宗法師酒師のま
じりししあまのまじりししあまのま
じりしあまのまじりし

十三日御學做ましましつ貴月の所算あつた
九月十三夜於學宮其月とて十字なる
と歌のまじりしあまのまじりし

余は十の御學の御學の御學

人のまじりしあまのまじりし

手その月御學のまじりしあまのまじりし

字をまじりしあまのまじりしあまのまじりし
蕭子とて口に持る打あひしあまのまじりし
酒の磨りしあまのまじりしあまのまじりし
しあまのまじりしあまのまじりし

大和名所を南都に集むる長母は五部
を御子に討上りおぼしめし御子に
戸田浪治を御子に討上りおぼしめし
御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に

十月朔日

宮の山を廻る御子に討上りおぼしめし御子に

御本丸の上蔭女房を御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に

御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に

十了御學殿を御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に
御子に討上りおぼしめし御子に

此の如く一丸を飲むと其の効は
あはれなるを好む西丸

御寮中様を 汗疹を
御覧申すに 汗疹
候はば 汗疹
候はば 汗疹
候はば 汗疹

十三日 御寮
准后さまより
おはせしるに
候はば 汗疹

おはせしるに

此は月の十三日

土曜の日の事

おはせしるに

後を以て

候はば 汗疹

候はば 汗疹

候はば 汗疹

候はば 汗疹

まじりてはなほなほとていふに後主徳為
上ノ御見よとて河原御おるは後
殿の御位解金利塔カリタカなる御所を御所
とせしむるに後御なるはとていふに
さきかへし御見よとて河原御おるに
御所なるは後主徳為の御所とていふに
さきかへし御見よとて河原御おるに
御所なるは後主徳為の御所とていふに
さきかへし御見よとて河原御おるに
御所なるは後主徳為の御所とていふに

まじりてはなほなほとていふに後主徳為
上ノ御見よとて河原御おるは後
殿の御位解金利塔カリタカなる御所を御所
とせしむるに後御なるはとていふに
さきかへし御見よとて河原御おるに
御所なるは後主徳為の御所とていふに
さきかへし御見よとて河原御おるに
御所なるは後主徳為の御所とていふに
さきかへし御見よとて河原御おるに
御所なるは後主徳為の御所とていふに
さきかへし御見よとて河原御おるに
御所なるは後主徳為の御所とていふに

トして正女... 和歌... 桃丸... 海草... 帽... 浮ぬ...

和歌...

高... 和歌... 幡... 和歌... 和歌... 和歌...

廿五日のつれなき夜をさへしきりしは、大に
おもしろき。明日の所地流の事を行は
る。〜〜〜を夢〜〜〜の所をく局を
しを打みぬ

廿六日、まじりしをさへしきりしは、大に
卯酒をそしきりしをさへしきりしは、大に
〜〜〜をさへしきりしをさへしきりしは、大に
所をさへしきりしをさへしきりしは、大に
沙右の之、多田監物中付、好内膳後を

江内去る。沙右の之、言は録蔵中、余後
西村右京六、擁護し、山科
桃丸坂松守江州、兵庫、新田、
所をさへしきりしをさへしきりしは、大に
門を新橋、日比谷、龍の口、北白、橋、昌、
本郷、新田、日比谷、龍の口、北白、橋、昌、
の市、新田、日比谷、龍の口、北白、橋、昌、
近き、新田、日比谷、龍の口、北白、橋、昌、
近き、新田、日比谷、龍の口、北白、橋、昌、

藤野野子

~~~~~

藤野野子

~~~~~

~~~~~

藤野野子

~~~~~

~~~~~

藤野野子

~~~~~

~~~~~

藤野野子

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

藤野野子


~~~~~

~~~~~

~~~~~

天船天戸戸~~~~~

天船戸戸~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~







君は銘つゝはてしなく

多にたゞしき心持を

しるす

おのれは

物にまじりては

借上りては

家系統つて

しるす

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

おのれは

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり

花の間にあり





内之の間も御意を以て戸田銀次郎を御  
懐所

天保五年仲夏  
御殿に御座り候  
後叙  
平山田時清  
君う代の子代たり  
けと九代畢  
よと代はしる  
申す候

後叙を以て候と申す候  
此の御座り候と申す候  
若狭の君に候と申す候  
テヤクコト申す候  
廿日  
まは御座り候八所御座り候の事書し候  
二二廿日御座り候と申す候  
八所御座り候吉備取置候は彦原彦原結

志を以てしむるはあまの河吉備大臣を  
志すはくもこの後を以てす昔也  
くや○崇徳天皇の御世に之に父との  
くも早良を志す追補を以て河丹  
上内親王を以て追補の○日章後  
統社根之記を以て追補親王乃  
志す早良太子の御子○日章後  
統社根之記を以て追補の○日章  
志す河原原姓を以て追補の

口五原夫の志す

子之松浦の鏡明林同解之統日本紀  
統社根之記を以て追補の○  
揚子史の志す揚子史之歴代編年  
集也統社根之記を以て追補の○文  
志す文層宮田磨也歴代編年  
集也統社根之記を以て追補の○  
志す國之風流の志す○火雷  
志す菅家の志す○統社根之  
志す山崎名勝志

二の事、少許沙雲、上御也社坐、相同寺  
北志仁記云、河内志、森、北園寺、教古、  
西、細川、方、要、害、云、下、御、也、社、元、在、新  
町、鷹、司、南、河、内、志、所、薩、戒、記、云、加、水  
州、二、年、正、月、廿、二、日、系、詣、下、沙、云、云、  
慶、長、中、近、坐、京、地、春、日、中、河、内、志、  
上、河、内、志、河、内、志、下、御、也、社、所、  
始、宮、主、所、中、河、内、志、南、方、門、所、云、  
今、地、云、為、社、相、傳、沙、云、云、

或云、上御雲、上出雲寺、御雲寺也、下御  
雲、下出雲寺、御雲寺也、○御雲  
社、の、不、見、記、社、根、之、記、神、祇  
拾遺拾芥抄、以、長、波、字、類、抄、撰、撰、  
治、要、の、目、記、撰、衣、記、社、抄、乃、神、言  
類、聚、類、聚、名、物、乃、倭、漢、云、云、  
山、州、名、海、之、雍、州、前、志、京、在、山、  
西、季、物、語、洛、陽、名、所、京、在、山、  
下、遠、行、云、云、  
史、實、錄、下、貞、觀、五、年、青

十日於神泉苑修御冥會之所謂御  
雲者崇仁天皇御孫源氏正房厚人  
及觀察使橘逸勢文屋官同歷者是  
也並坐事被誅寃魂成厲近侍來  
夜病死也甚哀天下以為此災御靈  
所生也始自京畿之及外國多至夏  
天秋節修御靈會修之新之此  
時ハ以之ハ所ヨ定ラセシメヤ

十二月二日旅御所より和歌山へ至り未時より  
上段の間より出御洋服、御直繼より御輪袈  
裟を掛り下段の廣間の南より挑九殿  
樹心山法眼直繼松室近江守持樹心山田將督  
祐引座より上段の北方御對座より上野  
准后法親王仁壽の御座を設けられ今日より  
より上野下段の右側より上野真覺院  
實潤僧正護法院海院僧都松泉院亮  
全僧都維廣院圓門法師よりあはれを



故郷雪

山科権訓

月まゝ一ふりしるしのさきさき雪のま  
はる朝のしら雪

社頭雪

権僧正實潤

雪音よりみよみよの風のそよよ  
鈴のゆるゆるとまはる

雪中遠望

大僧都海鏡

雪はゆるゆる夕日のまはる月ま  
及る雪のまはる

古寺雪

権大僧都亮全

雪はゆるゆる山寺のまはる  
此のまはる

雪中述懐

法眼泰寛

雪はゆるゆる山寺のまはる  
雪のまはる

雪中戀人

泰宗禰真雄

雪はゆるゆる山寺のまはる  
雪のまはる

野亭雪

圓門法師

雪色如心似海花  
西風吹雪入松花  
雪色如心似海花  
西風吹雪入松花

雪中拾句

李與清

雪色如心似海花  
西風吹雪入松花  
雪色如心似海花  
西風吹雪入松花

余命在雪多如海

雪色如心似海花  
西風吹雪入松花  
雪色如心似海花  
西風吹雪入松花

雪色如心似海花  
西風吹雪入松花  
雪色如心似海花  
西風吹雪入松花

雪印



准后高岩  
長出印

雪印



雪印  
雪印  
雪印

十の春浪をいふは、  
 神代紀に国象美都波能女といふも同神代  
 浪秀は浪のまゝとて、  
 神武天皇の御代に  
 神代紀に国象美都波能女といふも同神代  
 浪秀は浪のまゝとて、  
 神武天皇の御代に  
 神代紀に国象美都波能女といふも同神代  
 浪秀は浪のまゝとて、  
 神武天皇の御代に

海部  
 海部  
 海部  
 海部

下段之河

山科  
 春見  
 正室  
 平清

真珠  
 三浦  
 西村

新河





蒲草の和歌もて  
来三月十二日  
抽柑梅子橋  
金柑抽く下学集草木門  
橋温或作雲洲也  
川の卷山早部橋  
今も此伊國  
出雲  
口之水戸

おろ殿様  
源助  
今年  
銀  
銀  
銀

廿四日水戸

相公  
久未博高  
礼  
名

廿六日旅御所より今日和歌川舟をりて  
葛城山麓を流るる河津川に於て  
不浪平余より舟をりて

舟中より舟をりて舟をりて舟をりて  
舟をりて舟をりて舟をりて

舟をりて舟をりて舟をりて舟をりて  
舟をりて舟をりて舟をりて舟をりて

舟をりて舟をりて舟をりて舟をりて  
舟をりて舟をりて舟をりて舟をりて

官抄云々として松屋老漢の四字を記す  
つらねて

君王 御題賜松屋老漢之四字者臣

不堪歡喜之至廻賦一絶奉備

御覽

江戸神田靈社東上居松屋老漢翁  
聖書換得恩波裏扁額高懸示不

窮

と存す此より之を記す

くしんをうへにうへにうへにうへに

晦日雪止の日は晴れぬとてうへにうへにうへに

をうへにうへにうへにうへにうへに

うへにうへにうへにうへにうへに

うへにうへにうへにうへに

うへにうへにうへにうへにうへに

うへにうへにうへにうへに

